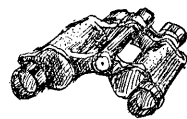


# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——（十二）



津 守 真

### 以前からいる子どもと新しい子ども——四歳児の 新学期

四歳児の新学期になって、いままで三歳児十五名で構成されていたクラスに、新たに二十名の子どもが加わり、三十五名になった。そのクラスに新学期になってはじめていったとき、はからずも、私にぶつかってきた現象は、以前からいる子どもたちと、新しく入ってきた子どもたちとの間の行動の仕方の相違や、ふれあい方であった。それは、いろいろのところで、いろいろの形で示された。三歳児からひきつづいてきた子どもたちだけでまとまって遊んでいた——その人数は二、三人から七、八人にまでわたる——新しい子どもが前からの子どもに近づいていって話しかけて

も、それに対して前からの子どもが答えなかったり、威張ってみせたり、また、ときには新しい子どもの手を引いたりしている。私の方も、前からつきあいのある子どもが近寄ってきたときと、全くはじめての子どもが来たときとは、私自身の感じ方が違う。これらのことは、大体きまった毎日の生活の中で変化し、成長してゆく姿を追うのとは違った、大きな環境変化に出会ったときのできごとである。古い子どもも、新しい子どもも、それぞれ、新たな問題と取り組んでいるに違いない。この場合のみでなく、現代の子どもにとっては、四月の新学期は、組かえがあったり、担任が変わったり、部屋が変わったり、幼稚園や学校をかわったり、多かれ少なかれ、環境の変化に出会ってとまどい、混乱し、模索し、戦い、自分なりの仕方を見つけてゆく時期である。

教師や親にとつても、毎年この時期は、いろいろと気をつかうことの多いときであることは、多くの人が経験していることであろう。

八月号の終りに、三歳児から引きつづいた幼稚園のクラスに、四月になつてはじめていったときのことを記し、以前からいる男児たちがかたまつて遊んでいるところにまずゆきあたつたことを述べた。次にその日のつづきから記して、三歳児からいる子どもと、新しい子どもとのことを考えてみたい。

#### 四月十八日（つづき）

（三歳児からの男児たちが数人くみきをしてあそんでおり、そのそばで新しい子どもたちも箱つみきを動かしているが、あまり交渉はないみたいである。空間的にも、古い子どもたちは、互いに近接して遊んでいる。）

多くの子どもたちが庭に出たので、私も庭に出る。MくんやNくん、その他、三、四人の前からの子どもたちが、砂場で細長く溝を掘り、水を流している。新しい子どもが二人、そのわきで同じように溝を掘り水を流している。Mはその溝の途中を砂でふさぎ、水が流れないようにせきとめている。MくんとNくんが、私

のところに洋服の袖口をまくってもらいにくる。私は三歳のときに親しくなつた子どもたちとの親しみを感し、昨年のMとNとのいろいろの場面のできごとが、頭の中を横切る。

新しい子どものKが、私に、「いれてくれないかなあ」という。私は「いっしょにやろう」と言つて砂を掘る。Kも溝のように砂を掘る。隣でやっている子どもたちと同じように、川にしてみたい様子である。私がシャベルで砂をつみ重ねて山のようにすると、トンネルを掘ろうとする。Kはシャベルなどを使つてもいいのかどうか、ためらっている。私が「どうぞ」と声をかけると、安心して使うようである。そのうちに、山のこちら側と向う側からトンネルを掘ろうとして、かなり長い時間試みている。おかえりの声がかかったので、私はいそいでトンネルを貫通させ、Kも満足する。そして、Kは砂山の上のつて足でふみつぶしてこわす。他の子どもたちも、よつてたかつてふみつぶして、砂場はおしまいになる。

帰るとき、出入口に列を作つて並んだとき、前からいた女兒Maは、新しい女兒Sが前の人との間に距離があいているのを見て、列から出て、Sの手をひいて並ばせ、そして自分の位置にもど

る。Sは入園以来泣いていた子どもとのことである。

女児Maのことは、以前の記録にも記したことがあるが、幼い感じで、私をみつけると私の傍にきて、他の子どもを近寄らせないことがしばしばあった子どもである。この日は、私を見つけたとき一寸にこっと笑って、手に摘んだ草を見せて、すぐに去っていった。私はMaが独り立ちしたように思えて驚いた。三歳の三学期には欠席が多くて、一寸したことで泣くことが多く、幼い感じがつづいていたが、四月になったら、急にすっかりしてきたことに、担任の先生も驚いているとのことである。

以前の男児Mくんは、四月になって、家に帰ってから、「ちっとも先生とあそべなかった」と言うとのことである。遊んでいるところを見たところでは、特別のことはなく、よく遊んでいるようにみえる。三歳のときには、よく乱暴をして他の子どもからこわがられていたが、四月になってから、影をひそめた感じとのことである。このMくんの場合は、以前に私は何度か記したことがある。

古い子どもと新しい子どもに関して、同様の印象は、その後もいろいろの場面で引きつづく。

#### 四月二十六日

私がゆくと、三歳児からの男児Sが、「こっちきて」と私の手をひいて室内につれてゆく。室内では、前からの男児ばかり、Mくん、Ms、T、Y、Hなどが、ままごとコーナーでままごとをしている。私をみると、皿にプラスチックでできたおにぎりやおもちを差し出す。私は食べながら、甘いとか辛いとか言っしてしばらく相手をしている。Mくんが突然、籠をがらっとひっくりかえす。

ままごとのわきで、古くからの男児N、Shなどがブロックをしている。三歳児から一緒だった男児の大半が、この一隅で遊んでいることになる。

私は、ままごとの御馳走がプラスチックの既製の形のものばかりなので、紙でごちそうを作ろうと思い、その一隅から離れて机の前に座り、紙にかきはじめる。するとすぐに、新しい男児Kが「何つくるの?」と言って寄ってくる。じきに新しい子が数人集まってくる。私は魚をかき、はさみで切り抜いて、ままごとをしている男児Sのところに、Kに持ってゆかせるが、SはKからは

受けとらない。私からじかに受けとろうとする。私とKはいろいろの物を作る。何回かKに、Sのところにもってゆかせるが、Kの作ったものとSは受けとらない。「なんだ、こんなの」ということもある。古い子どもたちも次第に机のまわりに集まってくるが、ときどき「なんだ、こんなの」という声がかきこえる。大きな魚は破かれてしまう、私は新しい子たちと、みかん、バナナ、おにぎり、とりなど作りながら、前からの子と新しい子の間に入って、いろいろと言ったりしたりして、かなり緊張した時間を過ごした。

四月の新学期のはじめに、はからずも直面して、私にとってショックだったことは、四歳という、こんなに早い時期に、古くからの仲間と新来者との区別をし、新しい子どもに対して素直に振舞えない人間の姿であった。この子どもたちは、つい一月前の三歳児の終りには、他の子どもたちの好意や拒否に対して素直に振舞い、お互い同士ぶつかりながらも、伸びやかに遊んでいた。少なくとも私にはそう見えていた。それが、新入の子どもが差し出した物に対して「なんだ、こんなの」と言って受けとらなかつたり、肩を張って威張って見せたりする。また、古くからの子ども

に向かつては、「おれたち前から、仲間だったもん」と言い、「あつちは違う仲間だもん」と言う。あるいはまた、ほんの一寸自分たちの方にはみ出してきただけで、「やめろよー、よせよー」と大きな声を出して、語調もかわる。いずれも、自分の仲間と仲間でない者とを区別し、同じ行動に対しても、仲間でない者に対しては、仲間とは違った見方をしていることを示している。これは、おとなの間では普通に見られることであるが、四歳児という幼い年齢で、こんなに明瞭にあらわれることが、私にはショックだったのである。この四歳児の最初に直面した現象について、もう少し考えてみたい。

第一に、三歳のときに一年間、一緒に遊んできた子どもたちが、もしも、そのままの編成で二年目にはいつていたら、ここに見たようなことは生じなかつたであろう。新しい子どもたちが加わることに、過去に共に遊んだ子どもたちのまとまりが、一つのクラスの中で目立つことになったのである。これは外から見ても、ひとつのまとまりであつたし、子どもたち自身の側でも、古い子どもに対するのと、新しい子どもに対するのとは、行為の仕方や見方は違ったものとなつていたと思われる。

物を差し出し、また、受取る行為において、それは顕著にあら

われた。新しい子どもが古い子どもに物を差し出しても、古い子どもはそれを受け取らない。「なんだ、こんなの」と言つてケチをつけたら、拒否したりすることもある。以前からの子ども同士では、同じように物を差し出したときには、素直に受け取るのである。また、新しい子どもが古い子どもに物を差し出すことはあるけれども、古い子どもから新しい子どもに物を差し出すことは稀である。新しい子どもにとっては、だれでも区別なく同じであるのに、以前からいる子どもが人の区別をするのである。

一般的に言つて、物を差し出されるとき、物は単なる「物」ではなく、そこには差し出す人の好意があり、こちらに向けられた親しみの心がある。だから、子どもが砂場で容器に砂を盛つて御馳走だといつて差し出してくれるとき、私共はそれを喜んで受けとり、そこから次の遊びが共有されてくる。

新しい子どもが物を差し出すとき、前からの子どもの側に、その物を、それに伴う心を素直に受けとることを妨げる何ものかの力がはたらいているように思う。この力は何であらうか。

そこで第二に、素直に他人に接することを妨げる力がどこからきているかを考えてみると、それは、古い子どもたちが、三歳児のときに一緒に遊んだ過去の経験に関係がある。過去の経験をつむことが、他人をある側面から見のように人を縛り、他人の中に

他の可能性を見ることを妨げさせる。これは、私共おとなの経験の中に多くあることであつて、不快な交渉によつて、その人に対する見方が作られてしまうと、そこから脱け出ることはなほだ困難である。あるいはまた、楽しく愉快に仕事をした仲間のあるときには、それ以外の人に対しては、仲間外の人と見て一緒に仲間に加えることが困難になる。楽しく有意義に過ごした仲間の経験が強いほど、誇りや優越感も大きくなり、新しく他人が加わるということが困難になりやすい。こうして、過去の経験に縛られて人を見るようになることは、おとなも子どもも避けられないことであるように思える。それは人間の心理の自然の傾向であるともいえるよう。

それでは、人は過去の経験に縛られ、その中に閉ざされた存在であるかという点、そうではない。われわれは、過去の経験がいろいろあるにもかかわらず、いま、他人に接するときには、新たな気持ちで接し、新たな可能性を他人にも自分にも見出すことをも体験している。人は過去の経験に束縛されながら、それを乗り越え、それから自由になる力を持っている。それは、決して無制限にはない。たえず束縛されながら、それをのりこえてゆくのである。それが人間の持つ精神の幅でもあり、また、文化や教養はそれを可能にする精神の世界である。

子どもは、四歳児という幼い年齢のときから、過去の経験に縛られて、他人を素直に見る目が曇らされる。すなわち、物を差し出す例でいうならば、物を自分の過去の経験の枠からだけ見て、物の背後にその人の心を見ることが妨げられている。それを乗り越える力は、物や人を経験するときに、物や人の外面をではなく、本質にまでふれるような体験をするところから生まれるであろう。すなわち、それはことばや観念によってなされるのではなく、物と取組み、人と一緒に遊んで、十分に遊びきるところまでゆくときに、その本質に近づくであろう。幼いときから、現象としてものごとを見てゆく仕方を身につけてゆくことが必要なのであって、一つの側面からだけの見方に固着させてはならないのである。そのためには、伸よくしなさいと言うのではなく、またその行為を批判するのではなく、約束ごとをもち出すのでもなく、おとなが一緒にになって身体を使って遊び、どちらの子どもと一緒に体を動かして遊んで面白かったという体験をすることが重要になるであろう。

第三に、前からの子どもも新しい子どもも、どちらも互いに交流して遊ぶようになることを求めているのだと思う。そのことは記録の中で、砂場で溝を掘り、水を流して川にする遊びに象徴的にあらわれている。その子どもたちは、その川を長くして、隣で

溝を掘っている子ども川の川につなげようとし、またトンネルを掘って、向う側の子どもの方に貫通させようとする。前からの子どもの中には、その川を途中でせき止めて他の子の流れに合流しないように試みる者もいるが、それでもいつのまにか、その流れは他の子どもとのつながっている。相互に交流してゆこうとする気持ちのあることのあらわれを見ると、この砂遊びも一段と面白い。

第四に、おとな自身の存在を反省することの必要性について述べたい。前述の四月二十八日の記録で、ままごとの御馳走を紙で作るところを見て、気付かれた方もあらうかと思う。ここでは、私と新しい子どもとで描いて切ったバナナやみかんを、新しい子どもに、前からの子のところに持ってゆかせているところがいくつもある。その時には、私は前からの子どもが受けとらないのを見て、憤慨に近い気持ちを持ったのである。ところが、記録を読み返しているうちに、これは私が新しい子どもに持ってゆかせたためではないかということに気が付いた。おとなの生活の中でも、人が直接に渡せばよいものを、他人に託して持ってこさせるとき、複雑な感情になることもある。子どもの場合にも、子どもが自分から他の子どもに差し出した場合と、おとなにいわれてそうした場合とでは、受け取る側の気持ちはまるで違うであろう。そういう点から見ると、おとなが間に入らないで、古い子と新しい

子だけに任されていたら、お互いに気持ちを直接に交流させる機会がもっと多いかもしれない。実際、おとながそこに加わるために、相互の直接の理解と問題解決を妨げることもあることは、私自身、しばしば経験している。

この場合も、私が三歳の時からこの子どもたちとつき合っているから、古い子どもと新しい子どもと区別して見ることができていたのであって、昨年を知らない人だったら、その区別も分からないであろう。そして、どの子どもにも公平につき合うことができるであろう。昨年を知っているから、古い子どもの新しい子どもに対する応待の仕方が気になるし、もっと分け隔てなく応待できないかという要求も出てくる。おとなの側のそのような心のあり方は、子どもに伝わらないはずはない。それは子どもへの心に対する圧力となって、両省の分離を一層強める働きをすることになるであろう。

子どもの側からみるならば、その前までは自分たちと遊んでいてくれたおとなが、新しい子どもたちの方に顔を向けて、その子どもの相手をするのだから、それだけでも、新しい子どもに対する否定的な感情がはたらくであろう。まして、そのおとなが、新しい子どもに託して物を渡しにきたときに、快く受けとれなくても無理はない。新しい子どもの手を経ずに、直接、私から受けと

ろうとするのも当然のことである。これが四月二十六日の記録の真中の部分のできごとである。そのときに私は、自分がこのような作用をしていることを少しも気づかなかった。

それでは、このような中立ちをするおとなが全く必要ないかというところ、私はそうは思わない。おとなは、どこかで子どもと一緒に生活しているのであって、それがなかったら保育もないであろう。また、子どもたちだけだったら、分離したまま動きのとれない場合も出てくるだろう。おとなが一緒にいて、両者の気を引き立てて面白く遊ぶようにすることによって、分離していた者同士が融合して遊べるようになることも、しばしば経験するところである。要は、そのときのおとなの心のあり方であると思う。見る目が公正を欠いたとき、その第三者は悪魔にもなりうる。おとなの倫理観や同情心から、どちらか一方だけに味方したら、それが正義のように見えても、分裂を大きくする役を果たしてしまう。こういうことを考えるとき、第三者として間にはいることのむづかしさを感じさせられる。この場合について言うならば、以前からの子どもたちに対して、この場で何とかしなければという私自身の要求を放棄して、その場に共にいるものとなればよかったのであると思う。これから数週間後の一日、新旧の子どもが入りまじって砂場にはいっていたとき、以前からの子どもが、私の膝

の上に長い時間座っていたことがある。いつも新しい子どもに対して威張った口をきいていたSは、このときはずっと穏やかにみえた。

三歳児が四歳児になって、新しい子どもが加わったとき、新しい子どもを区別して見ることは自然の心理でもある。にわとりや猿でも、新入りのものをいじめるという。しかし、そこにとどまらないで、それを乗り越えるところに、人間の人間らしさがあるのだと思う。それは、過去に縛られながら、過去の経験から自由になることのできる精神の世界をもつことによって可能になる。それは単に倫理意識を教えることから生まれるものではない。そ

れは、偏見を固着させ、分裂を大きくさせる作用をすることもあ  
る。そうではなくて、身体を動かして直接に他人と体験を共有  
し、それを通して自他の中に新たな可能性を見出し、人間の本質  
にふれてゆくことによって、心の中に形成されてゆく世界であ  
る。それはおとなにとっても、物や人やできごとに出会う度に、  
常に新たな課題である。年齢が長ずるに従って、文化や教養がす  
べて関連してくるのであるけれども、幼児の時には、明確に意識  
化された言語以前のレベルにおける過程である。いろいろの子ど  
もと、本気になって遊べるようにすることの重要性を、この点か  
らも考えるのである。

(つづく)

